
お面を付けた神隠し

椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お面を付けた神隠し

【Nコード】

N2192U

【作者名】

椋

【あらすじ】

全ての始まりは10年前。

穏やかだった小さな町は、じわり……じわり……と足音も立てずに忍び寄る恐怖に気が付いた。

目を離したつもりはない、一瞬の出来事だった。

その日、両手では足りない数の幼児が、小さな町の中の様々な場

所から姿を消した。

数日が経つても、数週間が過ぎても、何の手がかりも見つからぬまま小さな町は怯えつづけた。

数か月もすると、何も進展のないこの事件は静かに、迷宮入りで幕を閉じた。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

これが、当時子供だった僕らが教えられ、そしてほとんどの住民が信じている事件の全容。

けれど、実はこの話には続きがある。

この話を聞く限りじゃ、消えた子供達は誰一人戻らなかったように聞こえるけど、そうじゃない。

戻った子供も確かにいる。

今も、この小さな町で、生きている。

そして、全てはまだ始まったばかり……。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

この話はフィクションです。

恐いお話ではありません。

ほんの少しだけ男の子同士のお付き合いが入るかもしれませんが

10年前。（前書き）

他に書いている作品が行き詰りまして、でも新しいお話が書きたくなりつついつい手が動いてしまいました（苦笑）

でも前の作品も今回も出来ればゆっくりでも最後まで完成させたいと思っていますのでどうか長い目で読んでやってください。

10年前。

あの恐ろしい事件から、もう1か月がたった。

事件は起こっても、その後何があるとうわけでもなく、誘拐なのか事故なのかも分からない、手掛かりもないまま幾日も過ぎ去り、誰もが諦めかけた頃、事件の被害者である子供が見つかった。

小さな町の、小さな森の奥にある神社の境内にぐったりと倒れていたところを神主が見つけ、警察に連絡をしたそうだ。

パトカーや救急車が駆けつけ、子供を乗せた救急車が病院に着くと警察から連絡を受けた両親が先に来て待っていた。

「あのっ、子供はっ！子供達は本当に無事なんですか！？あの子達は今どこにいるの！？」

……そう、助かった子供は2人。

慌ただしく警察や病院の関係者が院内を行き来する中、子供の母親らしき女性が、普段はふわふわしていそうなパーマがかつた栗色の髪を振り乱して目の前を通り過ぎようとしていた警察官の腕を掴み、乱暴に聞く。

「うわぁ！なんだアンタ！？一体何処から入ってきた？！ここは関係者以外立ち入り禁止区域だぞ！」

警察官は、暗い病院内で突然腕を掴まれたからか驚き、女性に負けない大声で怒鳴りつけてきた。

一方、女性は今にも泣き出しそうな顔で、目の下にある大きなクマよりも目立つ充血した瞳を潤ませた。

隣には父親らしき男性が立っているが、黒く長い髪を後ろで結び、眼鏡をかけていて色白で、いかにも気が弱そうな感じだ。

「花、少し落ち着きなさい。あの、警察の方ですよ？すみませんが、ここに男女の双子が運び込まれたはずです。病室を教えてくださいたいのですが、わかりますか？」

物腰も柔らかく、丁寧な口調で話してはいるが、この男性もまた、目の下には大きなクマがあり、どうにも辛そうである。

「ご両親ですか？失礼しました。では、申し訳ありませんがまずは身分証の確認からさせていただいてもよろしいでしょうか？」

警察官も急に口調を変え、まあ仕事なのだろう。まず先に目の前に立つ2人を疑いのこもった目で見ている。

「はい、連絡が来た際に言われてあったので」

ポケットから2人分の身分証を取り出すで、警察官に渡す。

「そうですか、どうも……。では少々お待ちください」

そう言っただけ、警察官は病院奥へ走って行き、3分もしないうちに2人の身分証と他にも何かを握りしめて戻って来た。

「確認しました。お待たせして申し訳ありません、ご協力に感謝

します。これはお返しします。それとこのプレートは関係者専用の物です、もし誰かに声をかけられたらこれを提示してください」

警察官は言いながら頭を下げ、

「あのっ、それで子供たちは!？」

ようやく落ち着きを取り戻した母親が聞く。

「はい、先ほど救急車が着いたばかりで、詳しいことは医者に聞かなければわかりませんが……どうも身体的に衰弱が激しいそうので集中治療室に運ばれたようです。今は他の患者もいませんので、泊まり込みも許可されています。案内は」

「案内は結構です。お気遣いには感謝します。あの、それで、衰弱と言うのは、2人共ですか？2人は起きて話すことは出来ますか？」

父親の男は、一言一句聞き逃すものと目を見開いている隣の妻の手を強く握り、警察官に聞いた。

「……お役にたてなくて申し訳ありませんが、詳しいことは医者ではないので……すみません」

警察官が本当に申し訳なさそうに頭を下げたので、父親はそういえばそうだった、妻の代わりに自分だけでも冷静でいようと思ってはいても中々に難しいなあと、自分も焦る気持ちや疲れを隠しきれないことをここにきて自覚し、これから子供たちに会うのだからと気を引き締めた。

「あ、いいえ。あの、誰に聞けば分かりますか？」

「病室には専任の看護婦がいるはずですので、そちらに聞くのが一番確実だと思われます」

「分かりました。ご親切にどうもありがとうございました。じゃ、もう行きます」

律儀にこちらに向かって敬礼してきた警察官に一礼して、エレベーターの方へと踏み出した。

じつとこちらの話を聞いていた母親の女性も慌てて頭を下げ、小走りで夫の後を追う。

「時生さん？……あの警察官さん、良い人だってわね。私、悪いことしちゃったわ」

前を歩く夫に、下を向いて歩きながら言う。

「名前を聞いて置くべきだったわ。乱暴に腕を掴んだりして……後で謝りたいもの」

「そうだね、でもきつとわかってくれたと思うよ？花が、子供たちを心配しているからこそ、乱暴になっってしまったことも、今、こうしてとても後悔していることも。だからこそ、丁寧に説明してくれたんじゃないかな？」

少し、ゆつくりと前を歩きながら妻に聞く。

「……そうね、ありがとう。でもやっぱり後で謝って来るわ。子供達には、いつも、悪いことをしたと思ったらすぐに謝りましょう」

って……そう教えているのは私だもの」

「うん、そうだね……」

夫は、疲れた顔に口元だけ、笑みを浮かべた。

そう、話している間にも、エレベーターは近づき、2人は足を止めた。

目の前には、誰も乗っていないエレベーターがあるだけで、他には何もない。

それなのに、2人は何故か、もう戻れないと、そう思った。

そして、2人はエレベーターに乗り、子供たちの病室へと向かった。

10年前。(後書き)

怖くないお話のはずが、何故か自分でもちよつと怖いかも……
すみません。

これから明るくなっていくはずだと思われます。

第一章 約束

空には闇が広がり、窓からは月の光が差し込む夜。

「秋冬^{しゅうと}、見て……月が笑ってる」

ベットに寝転がりながら本を読んでいると、ベランダに出ていた双子の姉が嬉しそうに僕を呼んだ。

「月……？」

僕は、仕方なく読んでいた本を閉じ、ベットから降りてベランダへと出た。

「春夏^{しゅんか}……？月がどうしたの？」

僕が聞くと、春夏は真っ暗な夜空を指さして

「見て、綺麗でしょう？」

指の先へ目を向けると、三日月がまるで笑っているかのように、空に浮かんでいた。

「三日月だね、確かにまるで空が笑っているみたいだ」

「でしょう？秋冬はいつも本ばかり読んでいるから、たまにはこう言っのを見たほうが良いんじゃないかと思って」

夜空を見上げながら、そう言って優しく笑った春夏は、三日月の何倍も綺麗だと思うのは身内鼻屑だろうか？お風呂上りで腰まである栗色のふわふわした髪はまだボサボサだけど、顔立ちは日本人離れしていて美人だし、背だって同年代の女の子よりずっと高いし……なんて関係ないことを考えていたら

「秋冬……？どうしたの？もしかして……興味なかった？」

僕がぼうつとしている間に、春夏は心配そうな顔をして僕の方を覗き込んできた。

「……、ううん。呼んでくれてありがとう」

「そう、良かった。もしかして怒っているのかと思って」

ほっとしたような顔で、胸に手を当てて言われた。

「春夏は、本当に小心者だよなあ。僕がそんな簡単に怒るわけないじゃないか」

そう、明るくて美人で家庭的な春夏にとって唯一といってもいい弱点は、気が物凄く小さいことなんだ。本当に憶病で、猫がすり寄ってきただけで驚いて、小さい悲鳴を上げるくらいなんだ。すり寄ってきた猫も驚いて逃げるのを、僕は何度も見送った……。

「……秋冬は、友達も多いし、冷静だし、私なんかとは、全然違うもんね」

春夏は俯いて、泣きそうなか細い声で言う。

「……夏休みも終わって明日からまた学校も始まるし、もう寝るよ。春夏、夏って言っても夜はもう冷えるから、風邪引かないように気を付けたほうが良いよ」

僕は、部屋へ戻り、ベットに潜った。

「……秋冬、ねえ……もう寝たの？」

ヒタヒタと足音をさせながら、春夏はベットの隣まで歩いてきて、僕に聞く。

「ねえ、秋^{しゅん}。もしかして、怒ってる？」

「……………」

僕は、わかりきったことをうじうじと聞かれるのが嫌いである。

「私なんかって言って、ごめんなさい。秋冬……なんか言って？」

これ以上無視したら、春夏は泣く。仕方なく僕はベットから顔だけ出して、口を開きかけ、大きなため息をついた。

「はあ……。春夏にだって友達はあるじゃないか、どうしていつも最後には、私なんかで終わるのさ。小さい頃は春夏の方が、……あれ？」

「どうしたの？」

何かを思い出せそうで難しい顔をしていた僕を見て、春夏はまた、心配そうに聞いてきた。

「……うん。何か、忘れているような気がして」

今、昔は春夏の方が友達多かったじゃないかって言いそうになった。

「何かって？」

「春夏は、昔からそうだったっけ？」

突然、変なことを聞いた僕を、不思議そうに見ながら、困ったように笑って言った。

「どういう意味？」

僕は春夏の瞳から視線を外さずに、続けて聞いた。

「昔から、気が小さい方だったっけ？」

「……？当たり前でしょう。どうして？」

どうして？と聞かれても、僕が聞きたいくらいだ。とは言えないなあ。

「うん、なんとなくね。ほらっ、ぼくらってさあ、小さい頃のことをほとんど覚えてないだろう？それでちょっと、気になっただけ」

上手く説明できるほどしっかりしたものじゃない、ぼんやりとした……よく分からない記憶だから、僕はおどけて見せてこの話はこれで切り上げようと早口で言い切り、春夏にもう一度寝るように声

をかけようとすると

「そう、秋冬は……知りたい？」

「え？」

春夏は一瞬、物凄く悲しそうな顔をして、すぐにいつもの優しい笑顔へ戻り、聞いた。

僕は、少し戸惑いながら答えた。

「……うん。そりゃあね？自分の事だし、いつかは思い出せたら
って、思うよ」

「時雨おじさんが言ってた」

「何を？」

「何かを、知りたいと思ったら、聞いても良いからね？って」

「いつ？僕は聞いてない」

なんとなく、予想はつく。

「おとうさんと、おかあさんのお葬式の日。秋冬、泣いてたから
……私に」

ほら、ね？

「どうしてすぐに言わなかったの？」

その時、僕は思わず、きつい口調で聞いたと思う。

「私は、昔の事なんか知りたくないもの」

そう言われてみれば、春夏はいつもこの話題を避けているようだった。

「秋冬は、覚えてないみたいだから言わなかったけど、約束したのよ？ 私たち……」

やくそく？

「誰と？」

「分らない。だけど、約束したの」

「分からないって、どういう事？ それに約束って？」

春夏は俯いて、肩が小さく震えていた。

「私も、少ししか覚えていなかったんだけど、約束の事は……お葬式の時思い出したの。だから、相手が誰だったか思い出せなくて……でもね？ あの日、いつものように2人で森へ行って遊んだ。夕方になって帰ろうとしたら、誰かに……声をかけられて、約束したの」

「森？ って、あの前の家の裏にあった？」

「……」

春夏は声を出さずに頷いた。

「秘密基地とか作って遊んだっけ、楽しかったよなあ。あそこにいれば誰にも見つからなかったしさ」

僕が、懐かしそうに話すと

「また、行きたい？」

と、聞かれて。僕は、あれ？と思った。

そもそも、そんなに楽しかったのなら何故行かなくなったのか……。それに、

「……いいや、どうしてか行きたくない」

そう、どうしてか行きたいとは絶対に思えないのだ。

「私も、行きたくない。ねえ、どうしてかな？」

考えたくもない、多分今の僕は顔面蒼白ってやつなんじゃないかと思う。

「……そりゃ、よっぽど嫌なことでもあったんじゃない？まあ、覚えてないんだからわかんないけどさ」

「秋冬、知りたい？」

春夏は、いつの間にか顔を上げ、僕を見てまた聞いてきた。

でも僕は、なんだか嫌な予感がしたし、春夏が急に真面目な顔をするから、もうすっかり冷めてしまった眠気を急いで呼び戻して、とつても眠くてもうダメだって振りをした。

「ううん、いいよ。それよりさあ、もう寝よう？僕はもう起きてられないよ」

「え？……ぷつ、ふふつ何それ？全く相変わらずね？秋冬ったらマイペース！！」

一瞬、ぽかんとして、目をまあるくしていたくせに、次の瞬間には笑って人の事をマイペースだなんて……ノー天気でいいよなあ。

「でも、でもね？知っていた方がいいと思うの、私たちだけの事じゃないし」

「……何？それって、どういう事？」

「私たちは約束したの。家に帰してもらっかわりに、一年に一度は必ずあの子に会いに行くって」

一息で言い切った春夏は、僕の方を見ているはずなのに……どこか遠くを見ていた。

第一章 約束（後書き）

すみません！！続きますが、もう夜も遅いのでここで一度切らせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192u/>

お面を付けた神隠し

2011年11月13日08時17分発行